

よく考える賢い子・思いやりのある優しい子・体を鍛える逞しい子



広田 PRIDE



広田小学校 学校だより 令和3年6月1日 文責 校長 梶山 和彦

輝くいのち 広田っ子！

運動会ではたくさんのご参観、準備・片付け等のご支援、本当にありがとうございました。子供たちも今ある力を存分に発揮し、まさにあふれる笑顔、輝く命を私たちに見せてくれました。子供たちの伸びしろはまだあります。この経験をこれからの教育活動につないでいきたいと職員一同考えています。

さて、6月は、「いのちを見つめる強調月間」です。佐世保市全体で取り組みます。コロナ禍のため、一堂に集まる集会はできませんでしたが、今朝は、子供たちに命の大切さについて、校内放送で語りました。以下は、その時に紹介した話です。ご家庭でも話題にしていいただければ幸いです。

＜命を見つめる校長講話で1年生から5年生に紹介した話＞

R3.6.1

【赤ちゃんの意思】

赤ちゃんを産むとき、陣痛というものがある。陣痛は初産で24時間、2人目以降で約12時間続くものらしい。妊婦さんの中には、この陣痛がとても苦しいので、「産む側は大変、赤ちゃんは生れてくる側でいいなあ」という方もいるらしい。しかし助産師さんは、これは大きな勘違いだと言う。赤ちゃんの方が、妊婦さんの何倍も苦しいのだと。実は、子宮は筋肉であり、これが収縮したり緩んだりするのが、陣痛の正体らしい。陣痛が始まり子宮が収縮すると、赤ちゃんは首のところを思い切り締め付けられ、へその尾からの酸素が途絶え、息ができなくなるそう。子宮の収縮は約1分間。その間、思い切り首を締められ、息ができない。1分経てば、また子宮はゆるむが、また陣痛が来れば1分息ができなくなる。しかも陣痛の間隔はだんだん狭くなる。この陣痛に耐えられなければ、赤ちゃんは……。まさに命がけだ。だからこそ、赤ちゃんは慎重なのだという。

実は、陣痛が起こるためには、陣痛を起こすホルモンが必要らしいのだが、このホルモンを出しているのはお母さんではなく、なんと赤ちゃん自身。赤ちゃんはとても賢く、自分自身で自分が今、陣痛に耐えられる体かを判断する。そして、一番いいタイミングで、自分の生れてくる日を選ぶ。(そう考えると、自分の誕生日も、自分が選んだ日なんだと思えた)

また、急に激しい陣痛を起こせば命が危ないので、最初は陣痛を起こすホルモンを少ししか出さず、様子を見てホルモンの量を調整するらしい。赤ちゃんの中には、予定日を過ぎてもなかなか生まれてこない赤ちゃんもいる。途中で陣痛を止める赤ちゃんもいる。そういう赤ちゃんを「うちの子はのんびりしている」なんていうお母さんもいるけど、その時赤ちゃんは必死なんだという。生まれてこないのは、赤ちゃんが、「今の体では陣痛に耐えられず死んでしまう」と判断しているからだそう。赤ちゃんはみんな、自分で判断して、自分の意志で生まれてくる。

「生まれたくないのに生まれた」なんていう人間はいない。

生まれようと思って生まれてきた自分の命、
友達の命、みんなの命 大切にしよう！